

令和元年6月26日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2018

課題番号：16K04572

研究課題名（和文）戦後地方文化運動の実証的研究 「ふだん記」各地グループを対象として

研究課題名（英文）An Empirical Study of the Post-War Local Cultural Movement -Focusing on Groups of 'Fudan-gi' Writers Across Various Regions-

研究代表者

川原 健太郎（Kentaro, Kawahara）

早稲田大学・教育・総合科学学術院・その他（招聘研究員）

研究者番号：80367010

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、八王子の実践家である橋本義夫が創始した庶民による文章執筆運動、「ふだん記」（ふだんぎ）の運動を全国各地で実践する、「ふだん記」各地グループの活動を追い、市井に暮らす普通の人々から生まれた草の根の地域文化運動の成立・発展過程を明らかにした。特に各地グループの歴史や活動の研究を通じて、1970年代後半以降に日本のさまざまな地で展開された書く実践の取り組みの実像に迫ることができたことに意義がある。本研究では多くの各地グループの協力を得つつ、草の根の記録を紡いできた多くの人々の声や、手書きのものも含め機関誌を蒐集しており、草の根の人々の戦後史の貴重な記録を集め、研究した点に重要性がある。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、戦後日本の各地において、草の根で紡がれてきた人々の歩みやその綴った文章をまとめ上げてきた。「ふだん記」の実践に焦点をあてることにより、日本の市井の人々の歴史の研究に関して新たな地平を切り開き得るといった意義があると思われる。

また、本研究で刊行した最終報告書は、「ふだん記」各地グループが実践を行う地域を中心に公共図書館等に寄贈しており、公共の閲覧に供される形になっている。なおかつ、アクションリサーチ的に研究を行った本研究は、「ふだん記」で執筆する人々をエンパワーメントする意義を果たしており、草の根で自らの歴史を紡いでいる人々がより一層の「自分史」執筆につながる社会的意義を果たしている。

研究成果の概要（英文）：This research follows the activity of various regional groups of practitioners of 'fudan-gi', a writing movement geared toward the masses that was established by practitioner Yoshio HASHIMOTO of Hachioji, analyzing the formation and development of a regional grass-roots cultural movement that was born of the common, working-class people across Japan.

In researching the history and activities of various regional groups, it was particularly important to examine primary sources of writing efforts that had spread across various regions of Japan from the late 1970's onwards.

With the cooperation of local group members, this research weaves together various members' commentaries on the grass-roots movement, examining collected handwritten journals and other post-war documentation important to the study, which serves to identify a post-war history.

研究分野：教育学

キーワード：社会教育 戦後史 生涯学習 自分史 書く実践 文化運動

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究面に関する背景

戦後日本で展開されてきた文化運動の一つに、文章を執筆する実践(以下、書く実践とする)がある。特に 1950 年代に隆盛をした生活記録運動はそれを代表する実践であり、歴史学や教育学などの分野で研究の蓄積が重ねられてきた。

本研究の対象である「ふだん記」(ふだんぎ)は八王子の実践家・橋本義夫(1902-1985年)が1960年代後半に東京・八王子にて創始した草の根の人々による文章執筆運動である。橋本の没後も、現在に至るまで半世紀以上活動を継続しており、草の根の人々が自らの来歴や日常で感じた事柄に関する文章を執筆する場として一定の役割を果たしてきた。「ふだん記」は、「自分史」のルーツとなる運動として注目されており、社会学や文化人類学、歴史学、教育学などで一定の研究の蓄積があった。

しかしながら、既存の「ふだん記」研究に関しては、主に「ふだん記」が活動を始めた初期の活動が研究の中心となっており、「ふだん記」の活動が確立して以降の実践を対象にした研究は待たれる状況にあった。また、「ふだん記」は1970年代以降から発祥の地八王子のみならず、各地グループと呼ばれる全国各地で「ふだん記」の実践を行うグループが作られ、北海道から九州に至るまでの広がりを見せているものの、これまでほとんど研究対象とされておらず、等閑視されているともいえる状況にあった。各地グループが研究対象とされてこなかった理由には、「ふだん記」運動の活動が多様な視角からの研究をし得る対象であり、各地グループ研究にまで至っていなかったことに由来していると考えられる。

(2) 社会的な背景

日本の戦後史においては、終戦直後から現在に至るまでたびたび地方に脚光が当てられてきた。地方創生など政策から地方に着目されている側面もあるが、やはりそれぞれの地方の文化運動を盛り上げてきたのはその土地に生きる草の根の人々であるように思われる。本研究の関心の一つは、全国各地で文化運動が展開してきた中で、人々はどのように文化活動に邂逅し、実践を行ってきたかを解き明かしたいと考えた点にある。

本研究では特に、書く実践を対象にして研究を進めたいと考えた理由には、社会的な背景として、全国で「自分史」が隆盛を誇っている点にある。「自分史」はその名称が示すように、書き手が自分の歴史を綴る実践であるが、1980年代以降に展開した「自分史」の運動は、現在無数の「自分史」の本が出版され続けるなどの広がりを見せており、地域の図書館に地元の「自分史」コーナーができるなどの影響を与えてきた。「ふだん記」は、草の根の人々が自らの「自分史」を書き、読み合い語り合う運動であるが、特に自らの来歴を記すことに重点が置かれており、「自分史」のルーツといわれる。「ふだん記」を対象にして戦後における書く実践の歩みとその展開を研究することは、現在広がっている「自分史」を現代史的な側面から知ることができる、社会的な意義があると考えられる。

2. 研究の目的

本研究では「ふだん記」の積み重ねてきた実践の中でも、全国各地で「ふだん記」の活動を行ってきた各地グループを対象とする。各地グループは、草の根の文章運動という「ふだん記」の理念に共鳴し、「ふだん記」創始後半世紀近くを経た現在においても各地で活動を継続しており、グループが置かれている地元の人々の記録を紡いできた。

本研究の目的は、日本各地で「ふだん記」の活動を行っている「各地グループ」の活動や実践に取り組んでいる人々の実像を描出すことにより、草の根の人々から生まれた各地の文化運動の成立・発展過程を明らかにすることである。

その土地に暮らす人々が自らのことを文章に書き、各地で文化運動を継続してきた各地グループの実像を解き明かそうとする、本研究の意義には、次の諸点が挙げられる。

第一に、「ふだん記」の実践が全国に広がった1970年代以降の書く実践の実像を解き明かすことができる点である。1950年代に全国で盛んに展開された生活記録・共同学習運動の動きは社会教育研究や歴史研究の視角によって解き明かされつつあるが、その後の書く実践に関しては、生活記録運動の規模で展開されたものはみられないことなどもあり、解明を待たれる状況にあった。そのため、本研究において各地グループの活動を明らかにすることにより、戦後、全国のさまざまな地方で展開されていた文化運動の実像の一端に迫ることができると考えている。

第二に、草の根の人々が、自らが体験してきた歴史を文章の形に綴ってきた「ふだん記」、特にさまざまな土地の記録を戦後史の貴重な資料として位置づけていくことができると考えているためである。

3. 研究の方法

本研究では研究方法として、(1)「ふだん記」各地グループへの訪問調査及び文友(「ふだん記」の執筆者のこと)に対するインタビュー調査、(2)橋本義夫や「ふだん記」に関係する文献調査、(3)各地グループが発行している機関誌の調査の三つの方法を用い研究を行った。

(1)の訪問調査・インタビュー調査では、各地グループへの窓口への個人インタビュー、

複数文友へのインタビューの二種類のインタビューを行っている。ここでは、インタビューのライフストーリー、「ふだん記」に参加した契機などを問いつつ、自由に回答してもらう半構造化の方法を取った。

インタビューを実施する文友のサンプリングに関しては、インタビューの主旨を伝え、応じていただける文友を中心に、各グループともに窓口や連絡調整を担当している文友の協力を仰ぐ形で、いわば目的志向のサンプリングを念頭に行いながら行っている。なお、各地グループのインタビューの調査場所は極力、グループの活動を行っている場所で行っていただき、さらに各地グループの機関誌を所蔵しているグループの活動拠点近くの図書館や公共施設など、「ふだん記」普及の実態を知るための訪問調査も併せて行っている。

(2)の橋本義夫や「ふだん記」に関係する文献調査では、橋本関連の資料を多く所蔵している橋本義夫記念資料庫、橋本義夫子息夫妻である橋本鋼二、橋本緑(雲の碑グループ窓口)の協力を仰ぎ、「ふだん記」や文章執筆に関する資料を中心に、寄贈・貸出を受け蒐集を行っている。

(3)の各地グループ発行の機関誌調査では、本研究プロジェクトおよび助走研究で訪問調査を行ってきた各地グループの窓口及び文友に協力を仰ぎ、インタビュー調査・訪問調査と並行して、各地グループが発行している機関誌の悉皆調査を行った。機関誌は、手書きをコピーし、手製本をした手作りのものや、謄写版で印刷した紙を二つ折りにした形態のものなど、ごく少数数のみの発行と推察される、貴重な号も含め蒐集・分析した点は本研究の最重要点の一つとして強調しておきたい。これらの機関誌は、著者名、表題などをまとめ、グループ毎に作品リスト化し、本研究の中間報告書に収録している。

ここで挙げた三点の研究方法を縦軸にとりつつ、三つの手法を束ねる研究理念として念頭に置いているのはアクションリサーチである。本研究の遂行にあたっては、研究者としての視点からの調査分析を行うとともに、帯広での訪問調査に合わせて実施した「ふだん記」に関する研究発表(講演)や、北海道ふだん記交流会留萌大会(2018年)への参加、多くの文友との手紙・ハガキの応答をしながら、協働的に研究を行ってきた。

4. 研究成果

第一は、「ふだん記」各地グループの成立過程から、1970年代後半以降の時期における、地方文化運動の展開の一つの流れを見出すことができた点である。各地グループは誰でも文章を書ける、草の根の文章運動という三多摩・八王子発祥の「ふだん記」文化に共感しつつ、地域ごとに独自性を発揮しながら実践を展開していた。「その土地よかれ その人よかれ」独立すれど 孤立せず」が各地グループの理念であるが、各地グループの実践展開の実証的研究を通じて、このような考え方にに基づき活動を展開している姿を幾度となくみることができた。各地域に「ふだん記」に共感したグループの核となる人々が生まれ、文章を書きたい・他者とつながりたいと考えた人々が集い、書く実践を担うグループが立ち上がった過程は、各地グループの成立の基本的な流れを示すものであった。グループの核となった窓口、集った文友ともにそれぞれ異なる理由を持ち実践に参加していた。集った文友は必ずしも「ふだん記」のスタンスを知り参加をしてきたわけではなかったが、「ふだん記」に参加することで、結果的に各地グループで重んじられてきた「その土地よかれ その人よかれ」を知り、それを体現する存在となっていたこともまた看過できない。

第二は、各地グループが積み上げてきた文章の持つ資料的な価値の重みを、再発見できたことである。「ふだん記」では文友それぞれが自由な執筆をする。そのため内容は一冊の機関誌内であっても統一感を持つことが少なかったが、それぞれが書き手である草の根に生きる文友たちが直面し感じたことを綴った文章であり、時宜に応じた記録の意義を持つ。さらに、多岐に亘る文友の体験に基づく叙述は、書き手本人のみが記録することができるものである。本研究で取り上げた文友の記録に限っても、その種類は、学校での学びの体験、戦争体験、北海道開拓の歩み、被災、文友の仕事や家族の日常の記録など、無数に存在している。各地グループで作られてきた文章は、草の根の文章運動であるからこそ生まれた、重みをもつ記録ととらえられる。自由闊達な執筆の場があったことで、各地方に多くの記録を紡ぐ結果につながっていたこともまた重要である。

第三は、戦後史の中に流れる、各地グループの実践の流れを見出すことができた点である。各地グループで文友一人ひとりが書いた記録は、個人が直面した時々の歴史を残してきた意味を持つが、各時代にあった歴史の主流とは必ずしも一致しない形で展開されてきた。むしろ、文友自身がそれぞれの経験を記録し積み上げてきたものである。そこには、同時代の歴史の主流と一致するものもあれば、それとは関わらない「自分史」もある。いわば、時代の大きな流れの大河を横にし、適宜合流・分岐を繰り返しながら、各時代における草の根の側流として流れ続けてきた存在のようにみえる。

第四は、各地グループの文友同士が行っている交流の姿を示すことができた点である。文友たちは、機関誌や書籍、手紙・ハガキを用いたメディアを軸にした小文での交流と、手紙や誌面といったメディア上と直接の対面を組み合わせた交流などを行っていた。前者は近年行われているSNSなどのニューメディアによるコミュニケーションを、後者はオンライン・オフラインの組み合わせによるコミュニケーションを連想させる。いわば現代的コミュニケーションの本質を先取りしてきた存在ともいえるのではないだろうか。「ふだん記」の文友たちのコミュ

ニケーションのあり方は、ICT 機器というメディアを用い、短文を交わすコミュニケーション方法と本質は変わらない。すなわち、「ふだん記」は 1960 年代後半に生まれ、一貫して短文を活用したコミュニケーションを行い続けた意義は大きいものと思われる。

なお、本研究の最終報告書として発行した図書は、北海道 6 グループを含め、研究対象の「ふだん記」各地グループが活動を行っている地元を中心に、公共図書館等に寄贈をおこなっており、広く閲覧ができるようにしている。なおかつ、アクションリサーチ的に研究を行った本研究は、「ふだん記」で執筆する人々をエンパワーメントする意義を果たしており、草の根で自らの歴史を紡いでいる人々がより一層の「自分史」執筆につながる社会的意義を果たしている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 6 件)

1 川原健太郎「地域における書く実践に関する研究—「ふだん記」みちのくグループを対象として—」、早稲田教育評論 33(1)、早稲田大学教育総合研究所、2019 年 3 月、pp.61-80。(査読有)

2 川原健太郎「1980 年代における戦後地方文化運動に関する研究—『ふだん記』北九州グループ、あいちグループを対象として—」、早稲田教育評論 32(1)、早稲田大学教育総合研究所、2018 年 3 月、pp.35-54。(査読有)

3 川原健太郎「橋本義夫の易行道に関する研究—学びの支援方法の視点から—」、大正大学教職支援センター年報 創刊号、大正大学教職支援センター、2018 年 2 月、pp.85-96。(査読無)

4 川原健太郎「地域における学習・文化活動の受容過程に関する研究—北海道における初期「ふだん記」を対象にして—」、早稲田大学教育学研究科紀要 25、2017 年 3 月、pp.15-27。(査読無)

5 川原健太郎「書く実践の意義に関する一研究—「ふだん記」を対象として—」、早稲田教育評論 31(1)、早稲田大学教育総合研究所、2017 年 3 月、p.1-19。(査読有)

6 川原健太郎「ナラティブの視点からみた書く実践に関する一研究」、日本学習社会学会年報 (12)、日本学習社会学会、2016 年 9 月、pp.99-106。【研究ノート】(査読有)

〔学会発表〕(計 3 件)

1 川原健太郎「戦後地方文化運動の実証的研究(その 3)—北海道における「ふだん記」各地グループを対象として—」、日本社会教育学会第 65 回研究大会(於：名桜大学)、2018 年 10 月。

2 川原健太郎「戦後地方文化運動の実証的研究(その 2)—「ふだん記」みちのくグループを対象として—」、日本社会教育学会第 64 回研究大会(於：埼玉大学)、2017 年 9 月。

3 川原健太郎「戦後地方文化運動の実証的研究(その 1)—「ふだん記」北九州グループ、「ふだん記」あいちグループを対象として—」、日本社会教育学会第 63 回研究大会(於：弘前大学)、2016 年 9 月。

〔図書〕(計 1 件)

川原健太郎『戦後地方文化運動の実証的研究—「ふだん記」各地グループを対象として—』揺籃社、2019 年 3 月。(総 206 ページ)。

〔産業財産権〕

○出願状況(計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年：

国内外の別：

○取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

- 1 (中間報告書)「戦後地方文化運動の実証的研究 『ふだん記』各地グループを対象として第二次中間報告書」(研究代表者 川原健太郎) 2018年2月。
- 2 (研究発表(講演)録)川原健太郎「『ふだん記』にみる生涯学習・社会教育の現代的意義」2018年1月。
- 3 (新聞記事)「早大の川原助教が『ふだん記』講演」(『十勝毎日新聞』、2017年10月6日付による紹介記事)。
- 4 (研究発表・講演)川原健太郎「『ふだん記』にみる生涯学習・社会教育の現代的意義」2017年9月、於：池上学院高校 帯広キャンパス。
- 5 (中間報告書)「戦後地方文化運動の実証的研究 『ふだん記』各地グループを対象として中間報告書」(研究代表者 川原健太郎) 2017年2月。

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。